The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本の大陸問題と西原亀三
Author(s)	森川, 正則
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44789
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	森川正則（もりかわまさのり）
博士の専攻分野の名称	博　士（法　学）
学位記番号	第　18343　号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 法学研究科法学・政治学専攻
学位論文名	**近代日本の大陸問題と西原亀三**
論文審査委員	（主査） 教　授　瀧口　剛 （副査） 教　授　坂元　一哉　　教　授　竹中　浩

論文内容の要旨

本稿は、大陸問題を巡る西原亀三の構想と活動を考察し、その軌跡を戦前期日本の政治外交史・大陸政策史の中に位置づけることを課題としている。

西原と言えば何より、寺内正毅内閣期の対中国政策、いわゆる西原借款で有名な人物である。それゆえ、西原研究は西原借款研究として行われてきたと言える。

しかし、西原が寺内内閣以前に韓国・満州で貿易商として活動したことは、ほとんど顧みられない。西原の基本的な大陸問題認識を探ろうとする際、西原借款の時期を取り上げるだけでは不十分である。また、寺内内閣以後における西原の大陸政策構想について論じられることもなかった。一九二〇年代・三〇年代初頭においても、西原は政界浪人として活動し続けた。その際、西原の政治活動は、彼の大陸政策構想と密接に結びつきながら展開した。

そこで本稿は、研究が手薄な寺内内閣以前・以後の西原について詳細に論じる。加えて、寺内内閣期の西原借款についても、先行研究とは異なる解釈を提示する。先行研究は西原借款の軍事的性格を強調し、アウタルキー経済を目指したものとして把握してきた。しかし、アウタルキー構築や軍事的性格を強調する視点では、西原の大陸政策構想の全体像を的確に把握し得ない。

貿易商としての実業経験を通じて西原は、大陸問題の核心が「開発」にあると考えるようになった。西原の「開発」論は、単なる資源の獲得ではなく、貿易・物流の活性化の基盤となる制度ないし社会資本（インフラストラクチャー）の整備を重視していた。西原の大陸政策構想は「開発」論を軸にして、「日露経済提携」論から「日中経済提携」論、そして「国際協力」論へと変容する。また、実業家から政界浪人に転じた西原の政治外交活動も、彼の大陸政策構想と結びつきながら展開していったのである。

以上のように、本稿は西原の大陸政策構想と政治活動を、一九〇〇年代初頭から三〇年代初頭まで跡付けることで、西原の伝記的研究を深化させる内容を備えている。西原は実業家として大陸問題への関心を形成しながら、なぜ政界浪人に転じたのか。また、政界浪人としての西原はいかなる存在であったのか。本稿はこの二つの問いを考えることによって、西原の特徴を戦前期日本の政治外交史の中に浮かび上がらせている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、西原亀三の政治活動とその思想を検討し、その軌跡を戦前期日本の大陸政策史及び政治外交史の中に位置づけた論文である。

序章では、西原についての従来の研究がいわゆる「西原借款」期に偏っていたこと、また「西原借款」自体についても専ら 1930 年代の大陸政策の先駆として位置づけてきたことを批判し、借款以前と以後の時期についても検討すると同時に彼の大陸政策の構想を内在的に検討する必要があるとして問題設定を行っている。以下第１章では朝鮮における貿易商としての西原の活動を分析してその「王道主義」思想及び大陸貿易構想の起点を解明し、第２章では寺内内閣期の西原借款が中国を「産業開発国家」とする構想を軸に展開されたこと及びそれが政治過程の中で挫折する経緯を分析し、第３章では 1920 年代以降の彼の政治活動が「国際協力」による中国の「開発」構想を軸とするものに帰着する経緯を明らかにしている。終章においては、西原の外交政策論は変化したが、その大陸政策の構想が通商関係を前提とする「開発」を軸に展開したことでは一貫性があり、またその「王道主義」思想故に中国などのナショナリズム運動への理解を欠くことになったと結論づけている。

本論文は西原の政治的軌跡を体系的に分析した数少ない貴重な研究である。通商と開発を軸とする分析の視点も斬新であり、論理の展開及び資料の渉猟も十分なされている。日本の近代大陸政策史の観点からも示唆するところが大きい。以上の点からみて、本論文は博士の学位を授与する価値があるものと判断する。